

情報化社会を生きる僕達の責任

氷上中学校 三年 泉 朋希

今ではポケットに収まる小さな機械一つで地球の裏側にいる人と会話ができる時代になった。僕達は、そんな「小さくても大きな存在」スマートフォンを毎日当たり前のように使っている。

今ではもう、当たり前になった生活の一部となっている「スマホ」。誰かとコミュニケーションをとったり、情報収集を行ったり、娯楽になったり。スマホを通じて、誰もが気軽に自分の考えや気持ちを発信できる時代を生きている。まさに「情報化社会」と呼ばれるのにはふさわしい環境と言えるだろう。

しかし、その便利さと自由の裏側には、見過ごすことのできない問題も潜んでいる。誰もが自由に言葉を発信できるということは、裏を返せば、誰かを傷つける言葉も簡単に世界中へと広がってしまうということでもある。中でも深刻なのがSNS上での誹謗中傷だ。匿名であるが故に責任を意識せず、他人の容姿や言動、立場を嘲笑したり、批判したりする言葉があふれている。

ある日、僕はSNSでの悪質な投稿が原因で、命を落とした有名人のニュースを目にした。匿名の書き込みに追い詰められ、心を深く傷つけられた末の悲劇だった。目の前にあるのがただの画面でも、その向こうには感情や尊厳を持つ「一人の人間」が確かに存在している。その事実を僕達は決して忘れてはならない。

言葉は、時に人の心を支え、救い、生きる力を与える。温かい励ましの一言が誰かの人生を良い方向に導くこともあるだろう。ただその一方で、言葉はとても脆く危うい存在でもある。使い方一つで、それは人を絶望の淵に追い込み、時に命さえも奪う。誹謗中傷の言葉は、目に見える暴力とは違い、外からではその傷が見えにくい。だからこそ、周囲が気づいたときにはすでに心が壊れてしまっていることもある。言葉の力を理解し、自分の発言が相手にどう受け止められるかを想像すること。それこそが、情報化社会を生きる僕達に求められている大切な責任だ。

最近では、誹謗中傷の言葉に「笑」という文字がつけ加えられることも多く見られる。例えば、「キモすぎる笑」のような投稿だ。一見すると冗談のように見えるかもしれないが、その言葉を受け取る側にとっては、笑の文字がついていようと、確かな悪意や否定の感情が突き刺さる。時には、笑をつけることで相手の反論を封じ「冗談だったのに、なんで怒るの」と責任を回避しようとする意図が感じられることもある。こうした軽い言葉の装いこそが暴力の本質を見えにくくしてしまっているのではないか。言葉を使う僕達一人一人がその裏にある意味や影響を深く考える必要がある。

さらに大切なのは、傍観しないことだ。もし誰かが誹謗中傷を受けている場面に会った時、僕は関係ないと目を背けるのではなく、「それは違う」と声を上げる勇気を持てるだろうか。沈黙は時に加害と同じ重みを持つ行動となる。

そして僕は、次第に強く確信するようになった。言葉は刃物のように鋭く尖っている。使い方を誤れば、それは容赦のない凶器となり、人の命すらも奪ってしまう。ナイフでついた傷は、時間が過ぎるにつれて消えていくかもしれない。だが、言葉のナイフが心に刻んだ傷は、目には見えなくとも一生残り続ける。その傷がふとした時に思い出され、胸の奥に痛みを生むことだってある。だからこそ、言葉を発するときには、その重さを理解しなければならない。

僕は思う。情報化社会を生きる僕達は、ただ情報を受け取り、発信する存在ではない。その過程の中で言葉に責任を持ち、人を思いやる心を育てていくことが求められているのだ。文字だけの世界では、声の調子や表情といった感情の「にこい」が伝わりにくい。だからこそ、言葉選びに慎重であるべきだ。

言葉を選ぶという行為はまるで自動販売機のようなものだ。ボタンを押してからでは、もう取り消すことはできない。押し間違えれば、自分が望まない飲み物を手になることになる。言葉も同じで、一度口から出した物は消せないし、相手の心に残ってしまう。だからこそ、僕達はその一言を発する前に、「本当にこれを伝えるべきか」「相手はどう感じるだろうか」と自分に問い直す習慣を身につけるべきだ。

これから先、どんなに情報技術が進化しても、言葉を使うのは人間である。だからこそ、僕達はその力を軽く扱わず、責任を持って使っていきたい。僕はこれからも、誰かを傷つけるためではなく、誰かを支えるための言葉を選び続けていく。それこそが今の時代、そして次の時代を生きる僕達の責任ではないだろうか。